

「リチャード3世」における犠牲者達 についての一考察

森 泉 弘 次

序

W. H. Clemen が言うように、リチャード3世は、シェークスピア最初の“heroic” drama として、リチャード3世というひとりの人物を中心にして構成され、筋展開は彼ひとりに依拠し、副人物達の行動は彼によって惹き起こされる。それ故従来の作品論のほとんどが、もっぱら主人公リチャードの解明に力点をおいていることも一応はうなずける。しかしそのために、彼の権力への野心の犠牲となる副人物達の意義が不当に軽視されてきたきらいはなかったであろうか。彼らは単に、リチャード3世という劇的興味に満ちた主人公を引立たす箔 (foil) としての機能しかもっていないのであろうか。T. Weiss のように、超人的な悪党 (villain) である主人公に手玉にとられる弱々しい、浅薄な、しかもそのほとんどは悪党的な人物として観客の同情をかちえることのできないという結論のみで彼らを一蹴してよいのであろうか。

勿論、筋の展開や主題の強調や劇的效果のために、人物の性格描写や個性表現がある程度犠牲にされることは避けられないし、シェークスピアの場合もそういう例は枚挙にいとまがないくらいである。しかしそのためにそれらの人物が性格や個性を全く失って、単なる作者の劇的意図のかいらいに堕してしまっているなら、主人公ばかりが浮きあがってしまって、芝居としてはつまらないものになってしまっていたであろう。シェークスピア劇の特色は、どんな人物も、純然たる choric voice 又は symbol として用いられている場合を除いて、程度の差こそあれ、生きた個性的人間としてそこに提示されている点にあるのではなかろうか。

本論の目的は、主人公の巨大な影におおい隠されて、従来ほとんどかえりみられなかった「リチャード3世」の副人物数人に光を当て、彼らがリチャードと接触していく過程で暴露されていく彼らの罪惡又は人間的弱さの内面的意義

を掘りさげることであり、同時に、彼らを謀略や誘惑によって陥れていく過程そのものが逆にリチャード自身の罪悪又は人間的欠陥を暴露していく過程にはかならないことを明らかにすることである。

テキストは *New Penguin Shakespeare Richard III* ed. by E. A. J. Honigmann (1968) を使用した。

一、クラレンスの場合

「ヘンリー 6 世」第 3 部によれば、テュークスベリの戦いでヨーク側が大勝利、捕虜となった皇太子エドワードはヨーク側三兄弟（エドワード、クラレンス、リチャード）によって殺され、ヘンリー 6 世はロンドン塔内でリチャードによって殺されてしまう。リチャードは王を刺した直後、次のように言う。

King Henry and the prince his son are gone:

Clarence, thy turn is next, and then the rest, (V. vi. 89-90)

「クラレンス、次はお前の番だ。ほかの奴らはそのあとだ」このせりふが、「ヘンリー 6 世」3 部作から次作の「リチャード 3 世」への無気味な橋渡しになっていることは言うまでもない。つまり、ランカスター側が倒されてヨーク家の天下が到来すると、こんどは王位への野望に燃えたヨーク三兄弟の末弟が、野望実現の邪魔になる同じ一族の生命を謀略によって次々と奪い取って行くことによって、ヨーク家の支配体制の自壊をもたらし、最後に、リチャードを倒して王位についたリッチモンド伯爵とエリザベス姫との結婚によって両家の事実上の和解が成り、権力闘争によって戦乱の巷と化した英国にようやく平和な春が到来する、というのが、簡単に言えば、この芝居の筋書きなのである。クラレンスは、言わば、リチャードの魔手の最初の犠牲者であり、又 T. S. エリオットによってそのヴァージル風詩美を絶讃され、³⁾ 又最近その劇的意義が見直されつつある⁴⁾ 1 幕 4 場の、いわゆる「クラレンスの夢」の主人公かつ語り手でもある。そういう意味で、クラレンスはこの劇の中で独自の位置を占めているといえる。

「ヘンリー 6 世」第 3 部 5 幕 4 場でマーガレット妃は、テュークスベリの戦いで決定的な敗北を喫したランカスター軍を航海のイメージを用いて励ましているが、その中で彼女はヨーク家の三兄弟をそれぞれ、エドワードを「無情の

海 (a ruthless sea)」、クラレンスを〈欺瞞の流砂 (a quicksand of deceit)〉、リチャードを〈恐ろしい、ごつごつの岩礁 (a rugged fatal rock)〉にたとえている。クラレンスの流砂、リチャードの岩礁というのは実に適確なイメージで、両者の性格の対照的な差違を鮮明に浮き彫りにしていると思う。後者が野心のためには身内も子供も容赦しない、憐れみも愛情も解さぬ冷酷非情の男で、しかもチャンスが来るまで本心を隠し通して、周到に罠を仕掛けて待つことのできる、権謀術数に長けた不屈の意志の持主であるという点で、まさしく、屈いた海面に姿を現わさぬが、ひとたび船体が当たればこれを大破・沈没させかねない〈ごつごつの岩礁〉のイメージであるのに対し、前者は、性善良で肉身の情に篤いが、のちに見るように、一時の激情で行動を決定する感情家であり、従って信念を欠く、事実上のオポチュニストであるという点から、美しい外見となめらかな感触を眞に受けてうっかり足を踏み入れようものなら、たちまちずるずる足をとられて命を失う破目になりかねぬ〈流砂〉のイメージにびったりである。

「ヘンリー6世」第3部をみると、クラレンスは、はじめのうちはヨーク家の重要な一員として、ボーリングブロック (のちのヘンリー4世) が冷徹な策謀によってリチャード2世から奪い取った王冠を、ヨーク方の長兄エドワードの頭に奪い返そうと必死になって戦ったのであるが、ひとたび王冠を手中にしたエドワードが生来の好色家ぶりを発揮して、フランス王の妹ボウナ姫に求婚すべくウォーリックを大使として派遣しておきながら、美貌の寡婦エリザベスと結婚したうえ、彼女の一族を貴族の身分に昇格させるという破廉恥なるふるまいに及ぶと、憤激したクラレンスはウォーリックと共に仇敵ランカスター側に寝返り、ヘンリー6世に忠誠を誓う。そしてウォーリックの長女と結婚するのである。やがてウォーリックの奇襲が成功してランカスター側が勝利を収めると、ヘンリー6世はウォーリック、クラレンスの兩人を英国の摂政に任じる。実はヘンリー6世はウォーリックひとりを選んだのであるが、後者がクラレンスを推薦して譲らないので、やむなく二人を任名したのである。このことは、クラレンスに対するウォーリックの信頼がいかに厚かったかを示すもので、二人は王の前に、又神の前に、忠誠と盟友の誓いをかわすのである。それにもかかわらず、ヨーク側が再び勢力をもりかえして、両軍がコヴェントリ城外で対峙するに到るや、クラレンスはウォーリックを裏切ってヨーク側に寝返ってしまうのである。従って「リチャード3世」におけるクラレンスは〈誓言破り

(perjury)〉という罪状の烙印を帯びて登場しているわけで、1幕4場の夢の中で、テュークスベリの野でヨーク三兄弟によって殺された皇太子エドワードと、クラレンスによって裏切られたウォーリックの二人の亡霊が現われて、この罪状で彼を告発し、呪うのである。

興味深いのは、クラレンスには裏切りの意識があまりないことで、それは、彼がリチャードのような冷徹な策謀家のタイプではなく、従って、計画的、意図的に相手を裏切ったのではなくて、その場の激情によって反射的に裏切ったに過ぎないというところに、その主な原因があるのではないかと思う。意図的であるか否かにかかわらず裏切りの罪は重大ではあるけれど。コヴェントリ城外における裏切りの場面においても、クラレンスは久しく会わなかった長兄の顔を見て、かねて抑えてきた肉親の情が急にこみあげてきて、反射的に寝返ってしまったというのがおそらく真相であろう。彼の並々ならぬ兄弟愛については、テュークスベリの会戦で、長兄エドワードを強剛な敵の手から救出したり、負傷と酷寒で凍死しかかった彼に自分の衣服を脱いで着せて暖めてやったりしたというエドワード自身の証言がある (II. i. 113-9)。しかしそれにしても、コヴェントリ城外で彼が義父でもあり盟友でもあったウォーリックに放った許し難い侮辱的なことばは、クラレンスの軽薄な人間性を暴露して余りあると思う (「ヘンリー6世」第3部 V. i. 81-102)。

裏切り又は誓言破りという罪に陥りやすいという彼の致命的な欠陥は、一つの長所と解き難く結ばれていて、過度の肉親愛が正義又は公正の原則を見失わせる結果となるという点にその主な原因があると思う。彼が肉親を裏切ってランカスター側に寝返ったのも、兄王がフランスのボウナ姫に求婚しながら別な女と結婚したことに対する義憤の結果というよりは、むしろ、彼が弟達のことをさしおいて妃の一族を優遇し、貴族にとりたてたことに対する、つまり肉身愛への裏切りに対する私憤の結果といった方が当たっているのである (Ibid., IV. i)。この肉親的なもの、私的なものへの執着がクラレンスから公正な観点、正確な観察力を奪い去り、彼を悲劇に追い込んだと考えることもできるのである。

クラレンスの過度の肉身愛と王妃一族に対する私怨とは、策謀家である弟のリチャードへの無条件的信頼と王妃一族への執拗な猜疑心となって現われる。「リチャード3世」の冒頭でリチャードが長々と独白をしていると、リチャードのまいた根も葉もない予言 (イニシャルがGである人間が国王の血統を絶つというもので、クラレンス公爵の名前は George である。リチャードも Duke

of Gloucester という称号をもっていることに要注意⁵⁾に迷わされた国王の命令によってロンドン塔に連行されて行く途中のクラレンスが登場する。何くわぬ顔でそのわけを聞いたあと、リチャードが、王をけしかけてあなたを投獄させたのは妃のエリザベスだ、ヘイスティングズ卿を投獄させたのも妃とその弟のリヴァーズ伯爵だったではないか、と言うと、彼はすぐそれを真に受けてしまうのである。そればかりか、あなたを釈放できなければ、自分が身代りになる (lie for you — tell you a lie にも聞こえる) ことも辞さぬ、という弟の心にもないことばに感激してしまう仕末なのだ (I. iv. 247-9 参照)。まさしくクラレンスは、彼が塔に向けて去ったあと、リチャードが、嘲笑的に言ったように〈Simple plain Clarence〉なのである。しかし1幕4場の獄中の場面で彼が語った夢は、クラレンスがリチャードの油断ならぬ欺瞞的性質を無意識裡に洞察していたことを暗示している。

クラレンスの語るところによれば、彼が見たという夢の前半は次のようなものである。

彼はロンドン塔を脱獄して、バーガンディ (Burgundy) に向けて船出した。一行の中に弟のリチャードもいた。弟に誘われる (tempted) ままに船室から甲板に出て、遠ざかりゆく祖国を眺めやりながら、ヨーク、ランカスターの幾多の争いと、その間に彼らの身にふりかかった苦難の数々について語り合っていると、足場の悪い甲板 (the giddy footing of hatches) につまずいたのか弟が倒れかかったので、とっさに彼は弟を支えようとした。すると弟は海中に転落しざま、彼を舷側越しにさかまく海中へ突き落したというのである。‘tempted’ ということばや、‘in falling / Struck me, that thought to stay him, overboard’ という表現をみると、誘惑者 (tempter) 又は裏切者 (betrayer) としてのリチャードのイメージが浮かびあがってくる。

中世の夢解釈は夢の予兆性、神託性を重視していた⁶⁾のであるから、クラレンスはこの夢によってリチャードへの盲目的信頼を少しは修正してもよさそうなものなのに、彼はこのあとリチャードが放った二人の刺客から、お前が頼りにしているリチャードはお前を憎んでいる、彼は〈石臼の涙 (tears of millstones)〉しか流せぬ薄情な人間なのだ、と言われても、〈弟は親切な男だ (he is kind)〉という彼の確信は微動もしないものである。このことは何を意味しているのだろうか。これは私の推測だが、あの夢が示唆している通り、クラレンスはリチャードが油断ならぬ男であることを無意識裡に直観していたのだが、彼の過

度の兄弟愛と、それに基く王妃一族への私怨とが、この直観又は洞察が意識化することを妨げていたのではないであらうか。あえて言うならば、彼はリチャードについての彼自身の洞察を受け入れる勇気がなくて、それを無意識の世界に抑圧してしまったのではなからうか。そしてその抑圧された洞察が、死の脅威が刻々と迫るロンドン塔の獄中で、夢の象徴的言語として表現されたのではないであらうか。シェークスピアは、'O, do not slander him, for he is kind' と弟を弁護するクラレンスに対して、第一の刺客の口を通して 'you deceive yourself' と批判させているのである。

クラレンスの夢がリチャードの悪魔的本性についてのすぐれた啓示を含んでいることは、上に挙げた、彼が船の甲板から海中へ転落する場面ばかりではなく、溺死した彼が海底に目撃した恐ろしい光景にも示されている。クラレンスが海の底に見たものは、無数の難破船の残骸と、魚群に肉を食いつくされて骨ばかりとなった無数の死骸であった。あたりにはこれまた沢山の高価な宝石、真珠等が散乱し、その中のあるものは、うつろになった死骸の眼窩に這いずり込んで (crept), 在りし日の本物の眼を嘲笑するかのよう^{トーン}にギラギラ光を放ち、あたりに散らばる死骸を小馬鹿にするかのよう^{トーン}に、ぬらぬらした海底に色目をつかっているのであった。この場面は、多くの批評家が指摘しているように、「大嵐」のエアリエルの歌 (I. ii. 388-400) を連想させる。確かに両者には共通点が多い。しかし私には両者の類似は表面的なもので、根本的には異質の調子 (tone) を湛えていると思う。前者にはエアリエルの歌がもつ、死の陰の谷をくぐりぬけて復活の朝に目覚めたような透明な調子が欠けている。死者の骨が珊瑚に、その眼が真珠に、〈何かしら不思議な美しさに満ちたもの (something rich and strange)〉に変容していたという、〈美しい変容〉が欠けている。そこにあるのは何かしら無気味な、不透明な調子であり、冷血動物的、爬虫類的なイメージであって、〈醜怪な変容〉としか言いようがない。否、変容 (transformation) ということばすら使いたくない。

Some lay in dead men's skulls, and in the holes
Where eyes did once inhabit, there were crept,
As 'twere in scorn of eyes, reflecting gems,
That wooed the slimy bottom of the deep
And mocked the dead bones that lay scattered by (I. iv. 29-33)

上の引用は、生命を欠いた宝石が生きた人間の眼が住まうべき住居を横取りしたような印象を与える。これは transformation というより usurpation である。又、エアリエルの歌には死者への畏敬の感情が根底にあるのに対し、クラレンスの夢の根底にあるのは死者への侮蔑の感情である。生命の存在を否定する人は死者への畏敬をも欠く。生者の敵は又死者への敵でもある。英国の王座の usurper であったリチャードは、生命の座の usurper でもあった。そして生命の座の usurper であった彼は又死者の座の usurper でもあったのである。にらまれた者は死ぬと言われるバジリスク (basilisk) の眼をもつことを誇ったリチャードは、1幕2場ではヘンリー5世の亡骸^{なきがら}を喪主のアンから引き離し、3幕5場では死せる兄王を侮辱しているのである。

以上の簡単な分析からもクラレンスが無意識裡にリチャードの非人間的本性を正確に洞察していたことが推察できる。してみると、クラレンスは第一の刺客に指摘されたように自己欺瞞者（ただし無意識の）だということになる。

クラレンスの自己欺瞞は、しかし、リチャードの人間性についてばかりではない。彼がウォーリックとランカスター族に対して犯した裏切り、誓言破りの罪についても同様である。彼の夢は、彼が無意識裡に罪責感にさいなまれていたことを暗示している。リチャードに海中に突き落されて溺死した彼の魂は、地獄の川の渡し守ケアロン (Charon) と共に常闇の国 (the kingdom of perpetual night) へとはいって行く。そこで彼の魂を出迎えたのは義父のウォーリックの亡霊で、亡霊は大声で

‘What scourge for perjury

Can this dark monarchy afford false Clarence?’ (I. iv. 50-1)

と叫んで姿を消すのである。続いて現われた、髪に血しぶきを浴びた皇太子エドワードの亡霊は

‘Clarence is come — false, fleeting, perjured Clarence,

That stabbed me in the field by Tewkesbury.

Seize on him, Furies, take him unto torment!’ (I. iv. 55-7)

と、呪いの声を発して姿を消すのである。5幕3場でリチャードは、良心はも

と臆病者が強者をふるえがらせる武器として発明したことばに過ぎぬ、とニーチェばりの良心論をぶっているが、クラレンスの夢は、良心の实在性の力強い例証と言わなければならない。クラレンスは、夢を通して、彼自身の良心によって perjury の罪を告発され、審かれているのである。そしてこの耐え難い苦悩の試練を通して、クラレンスは自己の罪を自覚し、魂の浄化を経験して行くのである。〈欺瞞の流砂〉にたとえられたクラレンスは、裏切りと自己欺瞞とに満ちた己の真相を直観し、神の審きを受け入れるに到るのである。

第一の刺客から、何故エドワードを刺し殺したのかと問われて、彼は

My brother's love, the devil, and my rage.

(I. iv. 226)

と答えている。偏狭な兄弟愛は公正さに欠けるゆえに悪魔に魅入れやすく、すぐ憤怒の激情と結びついて残忍なふるまいに及ぶ。ここには自覚されたクラレンスの真の姿が実によく定義されていると思う。

クラレンスは夢の中で溺死させられたように、第一の刺客に刺されたあとぶどう酒の大樽の中に投げ込まれる。これが聖餐式を連想させることは言うまでもない。残忍な悪魔の所業を宗教的ヴェールで偽装する dissembler Richard の本質を、ぶどう酒による殺人という方法ほどの確に表わすものはない。しかしこの苛酷な試練をまともに受けとめ、偏狭な肉親愛と復讐心と自己欺瞞から解放されたクラレンスは、この残酷な殺人方法を、魂を罪過から清める聖餐式に変容させている、と言うのは言い過ぎであろうか。第二の刺客がクラレンスの切実な訴えに動かされて、殺人から手を引いたばかりではなく、第二の刺客の突き出す剣から彼を守ろうとして叫んだあの一声（一瞬遅く間に合わなかったが）は非運のクラレンスにとってせめてもの慰めであったかも知れない。

二、 ア ン の 場 合

1 幕 1 場で第一の犠牲者クラレンスをロンドン塔に見送ったあと、次の幕に登場してリチャードの野望の犠牲になるのは Lady Anne である。彼女はかのウォーリックの末女で、皇太子エドワードの妻であった。彼女は義父のヘンリー 6 世をロンドン塔でリチャードによって殺されており、その前にはテュークスベリーの野でリチャード含むヨーク三兄弟^{なまがら}によって夫の皇太子エドワードを惨殺されている。今しも彼女はヘンリー 6 世の亡骸に喪主として付きそって登

場するのである。彼女は棺を路上におくよう命じ、次のように悲痛な lamentation を述べはじめる。

Poor key-cold figure of a holy king,
Pale ashes of the house of Lancaster,
Thou bloodless remnant of that royal blood,
Be it lawful that I invoke thy ghost
To hear the lamentation of poor Anne,
Wife to thy Edward, to thy slaughtered son
Stabbed by the selfsame hand that made thee wounds!

(I. ii. 5-11)

アンは殺された聖王の亡霊に呼びかけて、リチャードへの呪いを長々と述べる。義父と夫とを殺された哀れな女としてその気持は充分理解できるのであるが、しかし、リチャードが将来結婚するであろう妻（自分がその妻になるとも知らないで）や、二人の間に生まれるであろう子供の上に乗ってその呪いを延長して行くのを聞くと、私にはついて行けなくなる。それは私がアンのような非運を経験していないせいかも知れないけれど。呪いという否定的な激情の行為は本来限度というものを知らず、極限まで行つてはじめてやむものなのであるが、それにしてもこの呪いはすさまじい。ランカスター側のカッサンドラ、マーガレット妃の呪いのスケールにはとうてい及ばないけれど。呪いは呪う者自身の頭上にかえってくると言われるが、アンの場合も同様で、同じ場面（1幕2場）の最後では皮肉にも彼女は、リチャードの誘惑に屈して、彼の妻になることを承知した女として現われるのである。つまり、行きつくところまで行かねばとまらぬ呪いの法則によって、彼女の呪いは一転して彼女自身のところにもどって来たというわけである。それにしてもシェークスピアはこの場面ですべてつもない力業（tour de force）を試みようとしている。義父と夫とを殺された女が殺人者である男の求婚を受け入れる。殺された義父の喪主として登場した女が、同じ場面の最後では、殺人者の婚約者として、義父の亡骸を路上に残して立ち去るのである。どうしてこんな起こりえないことが起こるのであるのか？ さすがのシェークスピアもこの誘惑の場面を完全に成功させているとは言いきれないが、しかし二人の白熱したやりとりを読んでいくと、アンが誘

感に屈服していく過程がもっともらしく思われてくるから不思議である。

「ヘンリー 6 世」第 3 部 4 幕 1 場を読むと、クラレンスがウオリックの姉妹と結婚する気なら、俺の方は妹娘と結婚してやると、王位により近い次兄と張り合うような気持を表白している。このときはまだアンは未婚だったのであろう。してみるとリチャードの現在の求婚の動機は「夢よう一度」ということであろうか。しかしリチャードがアンに愛情を感じていたとはとうてい考えられない。第 3 部 5 幕 6 場においてリチャードはヘンリー 6 世を刺殺した直後

I, that have neither pity, love, nor fear

(V. iv. 68)

とうそぶいているくらいだから。さらに「リチャード 3 世」1 幕 1 場の終りのところでも、アンと結婚する決意を述べたあと、*'not all so much for love / As for another secret close intent / By marrying her which I must reach unto'* と、目的は愛情より王冠の方にあることを匂わせている。同じヨークの血筋を受け継ぐ無比の英雄ウォーリックの娘で、しかもランカスター家の皇太子の妃であったアンと結ばれるということは、確かに王冠への有力な布石であるには違いない。

さて私がリチャードのアン求婚の動機という問題について長々と述べて来たのにはわけがある。私は、この誘惑成功の理由の一つは、彼の動機が愛ではなかったということ、というよりむしろ彼が〈愛情の不能者〉だったという点に見出すからである。Theodore Weiss は、リチャードが性的なもの (the sexual) を単なる性欲 (lust) と同一視し、自分の中の性的なものを否定したと述べているが、私はそんなあいまいな言い方をするより、リチャードは根源的な意味における性的不能者であると言い切りたいと思う。交わりを本質とする人間本性の根源的要求を性的なるもの (the sexual) の核心に見出す私は、性を真に性らしめる、又は性を真に人間生命の表現たらしめるのは異性への全人格的愛情だと考えているので、*'I am myself alone'* を唯一の信条 (credo) とし、他の人々を自己の姿を映す鏡か、自己の野望実現のための利用対象としか考えられぬ〈愛の不能者〉である彼が、性的なるものを真に享受する能力があるとはとうてい考えられない。アン誘惑の場面で用いられる性的なイメージには生命のぬくもりは感じられず、冷い、爬虫類的な、生命を氷りつかせるような、不毛の情欲が露呈されている。それは、前章でとりあげたクラレンスの夢の中

に出てくる、あたりに散らばっている死骸を小馬鹿にするかのように、ぬるぬるの海底に秋波を送っている、骸骨の眼窩の中に忍びこんだ (crept) 宝玉を思わせる。これは内側に屈折した歪められ性衝動であり、生命と生命との直接的交流としての性の交わりにはほど遠いものである。それが外に向けられるときは必然的に violence (愛の不能の端的な証拠) になるか impotence になるかのどちらかである。アン誘惑の場面では心理的次元における性的 violence が行われているように私には思われる。

さてリチャードは先にも引用したように、憐みも愛情も畏れも知らぬ男である。従って、心理的自己投射の結果、他の人々の中にもこれらのものの本源的可能性を信じてはいない。憐みや愛や畏れがあるとしてもそれは本源的なものではなく、克服されるべき弱さ、又は利己主義や憎悪をおおい隠す偽装であるに過ぎない。ここで言う畏れ (fear) というのは、一般的な不安、恐怖ではなく、神又は神の審きを畏れる心、野心のために人を陥れたり、殺したりすることへの道徳的反拗を意味するのであって、それは、この劇の中に瀕出する良心 (conscience) と本質的には同じである。

リチャードにとって人間の本性は愛情や憐みなどではなく、利己心、野心、虚栄心、憎悪などであって、前者は付随的なもの (the contingent) に過ぎない。従ってリチャードには、真の人間らしさ、真の女性らしさが愛情や憐みに在ることがわからない。Lady Macbeth のいわゆる 'the milk of human kindness'こそ、人を人たらしめ、女性を女性たらしめるものであることがわからないのである。彼にとって女性とは欲望と虚栄心のかたまり以外の何ものでもない。ただ虚栄心から信心ぶったり、貞女ぶったりしているだけのものはないのである。その点でリチャードは女性の致命的な弱点を鋭く洞察していると言わなければならない。しかし、同時に彼が、神によって創られた女性の本性 (nature) について完全に盲目であることをも指摘しておかななければならない。要するに私の言いたいのは、女性の本性に対する盲目のゆえに、欲望や虚栄心を女性の本性であると錯覚している一面的女性観のゆえに、リチャードは完璧な確信をもってアンを誘惑できたのであり、この確信が誘惑を成功に導いた要因の一つだと私は考えるのである。

他方、誘惑は人の本来的なものへの訴えかけではなく、非本来的なものへの訴えかけであるゆえに、誘惑に屈するということは自己の本性を裏切るということであって、目が覚めてみれば後悔の念にさいなまれることになる。結局誘

惑は人を自己欺瞞に導くことによって、己の本性に逆らう方向に決断させることであり、そこには、己の本性から発する内発的な、自由な同意のはいる余地は全くないのである。

さてテキストにもどると、まず目立つことは、リチャードがアンからどんなに呪いのことばを投げつけられても、屈することなく(?)、アンの女性的虚栄心をくすぐる讃辞をくり返し呈していることである。しかもそこには宗教的イメージさえ用いられていて、信心や美徳に弱い女心を巧みに衝いているのである。さいしょの二発は 'sweet saint' 'divine perfection of a woman' という宗教的讃辞、それから 'Fairer than tongue can name thee' と宗教性抜きの美貌讃辞に変わり、このあと来るのは明らかに性的魅力への讃辞である。 'Your beauty, that did haunt me in my sleep / To undertake the death of all the world, / So I might live one hour in your sweet bosom'。宗教的イメージと性的イメージとを結びつけた讃辞は女性にとってもっとも誘惑的なものであって、リチャードは、欲望に動かされながら、あえてそれを自覚する勇気がなく、美徳や敬虔の観念に陶醉する、女性特有の〈無意識の偽善〉ともいうべきものを観客の前に暴露してみせるのである。

リチャードのアン誘惑成功に彼の巧みな言語操作(ことばの魔術)が大きな役割を果たしていることについては多くの批評家が語りつくしている餓があるので、それについて詳説することは控え、只一箇所だけ挙げておきたいと思う。リチャードによって殺されたヘンリー6世を話題にしているところで、アンが、国王は天国にふさわしい人だが、あなたに向いている場所は地獄だけだという意味のことを言うと、リチャードは、いやもう一つあります、何んなら申し上げましょうかと応じる。このあと二人のあいだに次のようなやりとりが行われる。

Anne: Some dungeon.

Richard: Your bedchamber.

Anne: Ill rest betide the chamber where thou liest!

Richard: So will it, madam, till I lie with you.

Anne: I hope so.

(I. ii. 111-5)

私が注目するのはアンの 'I hope so' である。これは言うまでもなく、リチ

ャードの 'So will it (=Ill rest will betide my chamber)' を肯定しているせりふであるが、リチャードか条件としてつけた 'till I lie with you' は、意味を逆転してしまい、アンはむしろリチャードとの結婚を望んでいることを暗示する結果になってしまう。そればかりではない。'I hope so' が Richard のせりふのさいごの部分に接続していることを考えるなら、せりふの言い回し方によっては、とんでもない効果を生み出しかねない。してみると、アンはリチャードの言語魔術にひっかかって、早くも彼に同調していることになる。事実このあとリチャードはかなりあらわに好色的なことばを用いてアンを攻めているのである。途中ははしょって、さいごにリチャードは、女に拔身の剣を渡して胸を広げ、そんなに私が憎ければ殺してくれ、と決死の愛(?)を披露する。¹²⁾ これで女は、'I would I knew thy heart' と、リチャードの本心への興味を示し、彼から指輪を受けとって、事実上彼の求愛を受け入れ、逢引の約束までしてしまうのである。

リチャードの誘惑は成功し、彼はアンと結婚する。しかし二人の新婚生活が地獄のようなものだったらしいことは4幕1場におけるアンの告白を聞けばわかる。いっときとして彼女は安眠できないのである。彼女はそれを夫が夜毎悪夢にうなされるせいだと言っているが、無論そればかりではあるまい。根本的には私はそれをリチャードの〈愛の不能〉に帰したいのである。〈愛の不能〉のゆえに、彼はいささかのためらいも羞恥感もなく、愛の感情を残りなく利用しながら¹³⁾ 確信をもって誘惑に専念できたのであり、又〈愛の不能〉のゆえに、女を全人格的に満足させることができないばかりか、かえって絶望のどん底に突き落してしまうのである。夢の中でクラレンスを海中に突き落したように。

アンは女性共通の弱点を巧みに、しかも執拗に衝かれてリチャードの誘惑に屈した。彼女はリチャードとの愛のない結婚生活を経験して、女としての自分の弱さを痛切に思い知らされた。そして呪いは呪う者自身にかえってくるという呪いの法則にも目覚めた。そのことは次のせりふに明瞭に表われている。

Within so small a time, my woman's heart
Grossly grew captive to his honey words
And proved the subject of mine own soul's curse,
Which hitherto hath held mine eyes from rest;

(IV. i. 78-81)

アンはこのあと、本来なら敵対関係にあるはずのエリザベス妃とヨーク公爵夫人の心のこもった慰めと祝福のことばを受けて、戴冠式場へ赴くのである。それが恐ろしい死への一步であることを予感しながら。

三、ヘイスティングズの場合

クラレンスとアンの場合と比較すると、ヘイスティングズの登場の仕方はきわめてアイロニカルなものである。1幕1場でリチャードがクラレンスをロンドン塔に見送ったあと、こちらはクラレンスとは反対に、ロンドン塔から、釈放されたばかりのヘイスティングズが登場するのである。無論ヘイスティングズもリチャードの中傷によって逮捕、投獄されていたのであるが、嫌疑が晴れて今釈放されたわけである。しかし本人はリチャードの陰謀によって自分が投獄されたなどとは夢にも思っていない。ヘイスティングズはかねがねエリザベス妃一族の異例の昇進に対して、クラレンス同様、抑え難い反感を抱いていたので、てっきり妃一派の仕業だと信じこみ、復讐をみずからに誓って出獄したのである。そこをリチャードから、クラレンスも同じ決意でいる、御兩人の敵は共通なのだから、などと煽るものだから、ヘイスティングズの誤った確信は一層強固なものになってしまうのである。ここにももうひとり simple plain な人間がいることに観客は気づかされるのである。興味深いのは、ヘイスティングズがリチャードの煽動的発言に対して次のように語っていることで、そこに、リチャードの謀略の罫にはまって自滅する彼の人間的欠陥がよく現われている。ヘイスティングズは、とんびやはげ鷹が自由に空を飛び回っているのに、鷲が閉じこめられなければならないとはまことに情けない、と言っている。この比喩的言語が暴露しているのは、クラレンスがうぬぼれの強い人間 (a conceited man) だということである。過度の自己評価が、のちに見るように、客観的現実を見る彼の眼を曇らせ、真の敵を見誤らせる原因となっている。

ヘイスティングズを立ち去らせたあと、リチャードは、クラレンスを片づけたら次はヘイスティングズの番だ、と彼の破滅を予告している。面白いのは、1幕3場でリチャードも、妃一族を前にして、ヘイスティングズと似た比喩を用いて、彼らの成りあがりを非難していることである。それは「世も末だ。鷲もとまれぬ高い梢でみそさざえが餌をあさっている」というもので、自分達を王者の象徴である鷲に擬しているのは共通だが、彼らの敵を、一方は carrion feeder として有名な kites, buzzards になぞらえているのに対し、他方は、小

さいもの、子供を連想させる ¹⁴⁾ wrens になぞらえているところに対照的な違いがある。

E. A. Armstrong によれば、kite は子供の手から食物を引ったくる鳥として知られている¹⁵⁾由で、この比喩は、妃一派によって特権を奪われていると信じこんでいるヘイスティングズの怨恨をかなりの確に表現していると思う。それに対してリチャードの方は篡奪者 (usurper) への怨恨というより、小さい無力なものへの輕侮が表現されていて、彼が野心のためには、罪のない子供らを殺してかえりみない〈子供の敵〉であることは、2幕2場の父親を殺されて孤児となったクラレンスの子供達が登場する場面、4幕3場のティレルによる王子殺しの告白をはじめとして、劇の中でくり返し強調されている。eagle という比喩に表われているように過度の自己評価という点ではヘイスティングズとリチャードは共通であるが、後者が積極的な野望に生きるタイプの男であるのに対して、前者は被害者意識が強く、怨恨という消極的感情に動かされている点が違っている。

1幕3場で、ランカスター側の犠牲者を代表してマーガレット妃が現われ、ヨーク側の人間を次々に呪いはじめる。その中で彼女はヘイスティングズ、リヴァーズ、ドーセットの3人を皇太子エドワードがヨーク兄弟によって殺されたときこれをとめず傍観していたと非難し、非業の死を遂げよと呪う。

傍観者のテーマはこの作品の中にくり返し現われて来る。たとえば、ロンドン塔長官のブラッケンベリは、リチャードが派遣した二人の刺客の手にクラレンスを引渡すとき、イエスをユダヤの議会 (サンヒドリン) の手に引渡した知事ピラト¹⁶⁾のような心境を洩らしている。

I am in this commanded to deliver
The noble Duke of Clarence to your hands.
I will not reason what is meant hereby,
Because I will be guiltless from the meaning. (I. iv. 92-5)

又、1幕4場で第一の刺客がクラレンスを背後から刺す瞬間、良心の促しにかられて 'Look behind, my lord!' と叫んだ第二の刺客も、怯懦から発する一瞬のためらいから許してしまった凶行について、

A bloody deed, and desperately dispatched!
 How fain, like Pilate, would I wash my hands
 Of this most grievous murder!

(I. iv. 274-6)

と、ピラトの意識を洩らしている。ヘイスティングズ、リヴァーズ、ドーセットらに共通しているのは、彼らがうぬぼれが強く自己反省を欠いていること、自分だけは安全地帯にいと信じこんで用心を怠っていることである。クラレンスの場合と同様、彼らの眼は前方にばかり向けられていてくうしろをふり向くことができない。その意味で、彼らも又クラレンスと同じような 'many simple gulls (I. iii. 327)' なのである。

傍観者のテーマは2幕1場にも現われていて、国王エドワードがヘイスティングズや妃一派など、内輪争いを続ける一族に和解の誓いをさせたあと、リチャードが登場してクラレンスの処刑を告げると、死刑命令の取り消しが間にあわなかったことを知った王は、後悔と悲嘆の涙にくれる。そこヘスタンレーが登場して、酔余の果てに喧嘩をして人を殺してしまった部下の助命嘆願をする、王は怒りを発して、家臣達一同に、何故お前達はクラレンスのために私にとりなしをしなかったのかと責めるのである。ここでも非難されているのは傍観者の罪であった。

興味深いのはエリザベスの弟リヴァーズと、先夫との子ドーセットの2人で、彼らは他人の苦悩に対する共感能力を全くといっていいほど欠いていて、冷徹な、ビジネスライクなセンスを常に働かしているという点では、リチャードにも通いあうものをもっている。クラレンスの孤児が父の死を嘆き、エリザベス妃は夫の病没に自殺しかねぬほど悲しんでいるというのに、2人は彼らに全く同情を示さぬばかりか、息子のドーセットの方は、そんなに身も世もあらぬ嘆き方をするのは恵み深い神への忘恩的行為だとパリサイ教徒さながらの冷淡な諫めを母にするのに対し、弟のリヴァーズの方は、夫の死を嘆くひまに王子のエドワードを即位させる手配をぬかりなく行なえと姉にすすめるのである。この直後に登場するリチャードが両人の発言と符合するようなせりふをしゃべるのも示唆的である。

リヴァーズ、ドーセットらは結局リチャードの陰謀を見破ることができず、少数の護衛だけで皇太子をルドロウからロンドンに連れてくることに同意して、彼ら自身のボンフレット城投獄と、二人の王子のロンドン塔幽閉に通じる道を

開いてしまうのである。王子達を守護する責任のある彼らは、無用心から王子達を破滅に追いこんでしまった。彼らの無用心は彼らの傲慢不遜から来る。妃との血縁関係に慢心して、己の分際をわきまえず、他の人々への配慮を怠ったところに彼らの自滅の根因があったと思う。

ヘイスティングズにもどると、3幕2場でスタンレーが使者の口を通して、昨夜グロスターに用心せよという夢告を受けたので一緒に逃亡しようともちかけると、ヘイスティングズは夢告を信じるスタンレーの愚かさを嘲笑し、彼が心配している分裂会議も味方のケイツビー（実はリチャードの一味）がいるから心配ないと言う。ここにも救い難い楽天家ヘイスティングズの姿が彷彿している。

ヘイスティングズはケイツビーから今日宿敵のリヴァーズらがボンフレットで処刑されると伝えられると、それを可としながらも、皇太子を王位からしりぞけるというリチャードの意志には賛成しかねると断言する。この点は、ヘイスティングズの王への忠誠が本物であることを十分に示してはいるが、リヴァーズらが理由もないのに突然逮捕されて処刑されるということと、リチャードが王位篡奪の計画をすすめていることを論理的に結びつけて、我が身に危険が迫っていることを察知することができない。彼の理性は妃一族への怨恨とリチャードへの過信とによって歪められているからである。ヘイスティングズのように自分を買いかぶることをしない慎重派のスタンレーが、リヴァーズらに対するリチャードの突然の処置に疑惑をもち、用心のためにはあえて臆病者の汚名をも甘受してもよいと考えるのとは対照的である。

王妃一族の悲劇に高みの見物をきめこもうとする彼の非情な傍観者性は

I live to look upon their tragedy

(III. ii. 59)

というせりふによく表われている。そればかりではない。調子に乗った彼は、妃の他の身内を自分の刃にかけてみせるとまで言っているのである。これはもう〈悪乗り〉〈はしゃぎ過ぎ〉としか言いようがない。

このあと彼と同名の従士が登場すると、ヘイスティングズは上機嫌で

How now, Hastings! How goes the world with thee? (III. ii. 95)

と呼びかけ、調子のよい返事をした従士を相手に、このまえお前に会ったとき

はロンドン塔に囚人として送られて行く途中だったが、今日は陰謀の張本人である女王一味が処刑されるめでたい日だ、という意味のことを言う。これに祝福のことは返す従士に御機嫌のヘイスティングズは、飲代として財布を投げ与えるのである。

この同名の従士の登場に注目している批評家は私の知る限りひとりもないようであるが、このエピソードは、ヘイスティングズという人間の秘密を解く重要な鍵を提供していると私は思う。ヘイスティングズの、外なる現実に対して心を閉ざしたナルシズムの傾向がここに暗示されていると私には思えるのだ。過度の自愛心又は自信は、外界を見ても、自分の見たいもの、自分の自信を裏づけてくれるものしか見ようとはしない。自分の在り方を根本的に批判してくるような注意や警告には耳を借さない。耳ざわりのよい追従的なことばしか耳にはいらないのである。結局、この従士ヘイスティングズというのは、ヘイスティングズの中のもうひとりのヘイスティングズ、彼がこうあれかしと願っている主観的他者存在、自分を無批判的に肯定し、賞讃してくれる他者ならぬ他者だったのではないであろうか。

結局ヘイスティングズは愛人の Shore 夫人との関係を毘にされて叛逆罪で逮捕され、傍観者の冷い視線を浴びながら刑場に連行されて行く。このときはじめて彼は、主観によって恣意的に処理できぬ客観的現実の存在することを知ったであろう。「人の機嫌のよい顔に希望をかける人は、マストの上の酔いどれ水夫同様、船がゆれるたびに、いつ転落して恐ろしい海底に沈むかわからない」(IV. iv. 98-101) というヘイスティングズの告白には1幕3場のクラレンスの夢の反響 (echo) がある。ヘイスティングズはまさしく自己についての幻想に酔ってありのままの現実が、足下に口を開いている深淵が見えぬ人であった。あるいは見ようとせぬ無意識的自己欺瞞の人であった。処刑を目前にして、今ようやく彼は己の真実の姿を見たのである。

(了)

註

- 1) Wolfgang H. Clemen, *The Development of Shakespeare's Imagery* (Methuen, 1951) p. 47.
- 2) Theodore Weiss, *The Breath of Clowns and Kings* (Chatto & Windus, 1971) p. 172.
- 3) T. S. Eliot, *Selected Essays* (Faber, 1951) pp. 89-90.
- 4) Cf. A. P. Rossiter, *Angels With Horns: The Unity of 'Richard III', Shakespeare's Histories* ed. by William A. Armstrong (Penguin, 1972) pp. 131-3.
- 5) Cf. Nicholas Brooke, *Shakespeare's Early Tragedies* (Methuen, 1968) p. 64.
- 6) Cf. Erich Fromm, *The Forgotten Language* (Grove Press, Inc. New York, 1957)
- Chapter V. *The History of Dream Interpretation*
- 7) *Henry VI*, Part 3, III. ii. 187.
- 8) Cf. I. iii. 284-5.
- 9) Cf. William B. Toole, *The Motif of Psychic Division in 'Richard III', Shakespeare Survey* 27 (1974) p. 25 with Notes 2
- 10) アンへの求婚の動機として王位への布石を第一に挙げるのは当然だと思うが、1幕1場のリチャードのせりふ I'll marry Warwick's youngest daughter. / What though I killed her husband and her father? (L. 153-4) を聞くと、不可能なことにあえて挑戦してみる、不可能を可能にするのだという、ルネッサンス的な冒険への無償の情熱を感じさせる。
- 11) Theodore Weiss, *op. cit.*, pp. 176-7
- 12) この部分を読んだとき私は「罪と罰」の、スヴィドリガイロフが密室でドゥーニャに求愛する場面を思い出した。ドゥーニャの愛をえられなかったスヴィドリガイロフはこのあと絶望して自殺してしまうのであるが、もしもリチャードがアンに拒否され、求婚に失敗したらどうするだろうか？
- 13) Cf. Theodore Weiss, *op. cit.*, p. 172
Richard.....makes much of feeling for his absolute lack of it; he exploits it like everything else for purely selfish, inhuman ends.
以上の Weiss の指摘はリチャードの誘惑の本質を実に鋭く衝いていると思う。
- 14) Cf. *Macbeth* IV. iii
- 15) Edward A. Armstrong, *Shakespeare's Imagination* (Univ. of Nebraska, 1946) p. 11
- 16) 新約聖書「マルコによる福音書」15章参照

